「福祉の実務者による体験授業」

新野　三四子（社会学部 社会学科）

新社会学部社会学科において、社会福祉学コースへの導入科目「社会福祉学への招待」ほか数種の福祉関係科目が新設、開講された。それらは、体験を重視した授業を提供することにより、学生たちが生きた社会福祉の実際に触れて感性を呼び覚まし、社会福祉への興味を開いていくことを目標のひとつとしている。そのために、福祉の実践家や福祉の当事者を講師として招き、学生たちに生の声と姿を伝える授業を企画した。

これらの体験授業を通して、学生たちの福祉の当事者や課題への理解が進むとともに、人間尊重の理念や人権視点が培われる契機となったものと評価できる。なお、実施にあたっては、社会学部の草山太郎、栗山直子、古川隆司の各教員の協力を得た。各回の内容は次のとおりである。

1．児童福祉現場における援助方法「幼児工作」体験ワーク

＜5月16日＞

講　師：倉科勇三氏（元芦屋美術博物館学芸員、園田学園女子大学短期大学部講師）

参加者：社会学科1、2年生16名

内　容：美術館学芸員として児童福祉援助に携わってきた実務者を招き、ワークショップ形式の授業を通して援助方法を学ぶことにより、学生たちの福祉実践への興味が深められることをねらいとして実施した。幼児工作「しろいろくろいろーワークショップのためのワークショップ」により、児童福祉現場で用いる幼児工作の方法を学んだ。

成　果：参加者はいずれも幼児工作の実技に熱中し、その中から大人の既成の概念を打ち破る新たな発見があったようで、有意義な体験学習となった。

2．現代の子ども・親子関係・その援助方法を学ぶ

＜10月10日＞

講　師：池谷允男氏（立教女学院・聖心女学院等スクールカウンセラー）

参加者：社会学科1年生168名

内　容：40年間にわたってスクールカウンセラーとして勤務してこられた経験から現代の子どもの生活とそれに対する側面的支援の必要性について講演された。とくに、学校の子どもへのかかわり、気になるこどもたちに対していかに側面的に支援するか、児童福祉の実践家として学校現場での援助方法について講演。公演時間は約40分で、前後に教員（栗山）が解説を行なった。

成　果：感想レポートをみると、学校の閉鎖性について自分の中高生時代と照らし合わせて大変共感した、とくにいじめについて傍観者の役割がいじめを助長させるということに同感、という

内容のものが多くあった。

3．福祉現場における良好な人間関係づくり入門ワーク

＜10月17日＞

講　師：浜脇和代氏（日本レクリエーション協会公認福祉レクワーカー、福祉職員研修担当者）

参加者：社会学科1年生163名

内　容：福祉現場における利用者とのコミュニケーションの導入方法を、①お席へどうぞ～　②お聞きします～　③グループ自己紹介　④Ice Build &Ice Breaking　⑤ご一緒に～　⑥まとめの順で講義と実技により学んだ。とくに、福祉の現場では、相手の立場になって、相手に快くなっていただきたいという精神に基づき、お互いが快さを感じるような人間関係づくりが大切であることが強調された。

成　果：参加者の大半は楽しそうに取り組んでいたが、「初対面の人との交わりが苦手」「実技が恥ずかしくてできない」（感想文より）という学生もいた。それぞれに、自分の言動や表情が相手にどのような影響を与えるかを考える機会となったようである。

4．施設における子どもの福祉を学ぶ

＜10月24日＞

講　師：八窪清氏（元大阪府立金剛コロニーすぎのき寮施設長）

参加者：社会学科1年生160名

内　容：大阪府立金剛コロニーくすのき寮の寮長として勤務してこられた経験から、知的障害児への支援について講演された。知的障害児への支援方法、知的障害児の高齢化と家族の高齢化について、フォーマルサポートネットワークの不可欠さについてお話しいただいた。講演時間は約40分で、前後に教員（栗山）が解説を行なった。

成　果：感想レポートをみると、知的障害児の生活問題とその高齢化、そして家族の高齢化という深刻な問題が浮き彫りになった、考えさせられた、知的障害児に対するスティグマが薄れた、という内容のものが多くあった。

5．福祉の現場と福祉ワーカーの仕事の実際を知る

＜11月14日＞

講　師：請川ひとみ氏（社会福祉法人光摂会社会福祉士、本学社会学科卒業生）

参加者：社会学科1年生158名

内　容：社会福祉への興味関心を喚起するとともに、対象学生が本学学生としての自覚や誇りを確立することを目的として請川氏を招き、福祉現場の仕事の実際、悩みや考えていること、「先輩」として「後輩」に伝えたい思い等を熱く語っていただいた。

成　果：「福祉現場の現実を初めて知った」「福祉の仕事に関心をもった」等とともに、社会人として

活躍している先輩の姿を見て「自分もここ（追大）でしっかりと学ぼうと思った」等の感想が見られたことから、ねらいどおりの成果が得られたと考えている。

6．ホームレスの人々の現状と支援の実際を知る

＜11 月 20 日＞

講　師：野上綾男氏（釜ヶ崎支援事務局代表、西成めぐみ教会牧師）
Ａさん（当事者）同伴

参加者：社会学科・心理学科 2,3,4 年生 14 名

内　容：野上氏より日雇い労働者の町釜ヶ崎（あいりん地区）の歴史、人々の置かれている状況、地域の生活実態などが、人権視点に立脚して熱く語られた。その後、ホームレス（路上生活）の当事者Ａさんを交えての質疑応答がなされた。

成　果：釜ヶ崎やホームレス支援について予備知識のない者がほとんどであったが、差別と偏見の中で生きてきたＡさんの実際の姿に出会い、身近な社会問題として考える機会となった。「とにかくいっぺん来てみいな」というＡさんのことばに、ぜひ訪問したいとフィールドワークに意欲を示す学生もあり、予想通りの成果はあったと考える。

7．当事者のライフストーリーを聞き障害をもって生きることについて考える

＜11 月 21 日＞

講　師：山田千恵子氏（肢体不自由当事者、自立生活センター「ほくせつ二十四」代表）

参加者：社会学科 1 年生 156 名

内　容：「障害を持って生きること」について考え社会福祉実践への興味を深めることを目的として、脳性まひの障害をもつ山田氏から、自立生活とは何か、自立生活センターとは何か、自立生活（センター）の現状と課題等について話していただいた。

成　果：「自立の意味について考えさせられた」「地域で生きることの重要性を感じた」等の感想の他に、初めて障害者の「声」を聞いたという学生も多く、それ自体が「貴重な体験だった」と省みていることから、ねらい以外の成果も得られたものと考える。

8．障害当事者と出会い生の生活実体験を聞く

＜11 月 28 日＞

講　師：倉本智明氏（視覚障害当事者、関西学院大学非常勤講師）

参加者：社会学科 1 年生 154 名

内　容：当事者の生の生活体験を聞くことで社会福祉実践への興味を深めることを目的に、視覚障害者である倉本氏を招いて、様々な実体験とそれらを通して考えた「障害とは何か」「障害者とは誰か」「ふつうとは何か」について講じていただいた。

成　果：「障害者問題は健常者の問題だということが理解できた」、「障害と社会との関係」や「ふつ

うという言葉の意味」について考えさせられた、「社会福祉に関わる仕事も面白そうだと感じた」等の感想から、ねらいは十分に達成されたものと考える。

9．高齢者から学ぶこととケアすることの豊かさを知る

＜12月12日＞

講　師：川端徳子氏（元特別養護老人ホーム健光園訪問介護ステーション主任）

参加者：社会学科1年生150名

内　容：本プログラムのねらいは、①高齢者福祉領域への関心をもってもらうこと、②受講者が今後学習を進めるためのモデルを示すことであった。まず、高齢者の在宅介護について、その制度・ホームヘルプの内容と介護保険制度について説明いただいた。また利用者の様子を紹介しながら支援とその留意点について説明いただいた。あわせて在宅介護における連携について言及もなされた。最後に「社会的な支えとは何か」「人に関わる仕事が自分にどんな内面の成長を促してくれているか」を仕事から学んだこととして課題提起いただいた。講義終了後、教員（古川）と講師による対談で講義内容の要点を再度説明いただいた。また対談の中で、福祉分野への志望動機や学生時代の経験のエピソードを挿んでいただき，受講者が自分自身の進路や今後の学習目標を考えていくための契機を作った。

成　果：受講者の反応としては「関心があまりなかったが講師の体験談を通して福祉に関する関心を抱いた」「育児と介護のつながりに興味を持った」等の感想が出された。

１０．地域にともに住む者として取り組みをともに考える

＜1月9日＞

講　師：永江結子氏（NPO法人楽々理事）

参加者：社会学科1年生150名

内　容：高齢者福祉領域への関心をもってもらうことをねらいに企画し、地元北摂で長らく保育所に勤務、その後高齢者の在宅介護に携わることになった講師を招き、高齢者による高齢者のための活動を講義いただいた。まず講師自身の介護体験から始まり家族とともに老いることを提起いただき、NPO法人を設立した経緯とその活動内容について伺った。最後に、老いることと家族や地域住民の結びつきの重要性を強調された。講義後、教員（古川）と講師による対談を進め、講義内容を補足しつつ受講者への理解を促した。

成　果：年代的に受講者の親世代にあたる講師からの講義であったため、家族としてどう親の介護に関わるかに対する感想があった。またNPO法人の事業内容についても感想があり、参加者の福祉への関心を高める成果があったと思われる。